
恋愛掌編集　～一分間のラブストーリー～

A Q

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋愛掌編集 〜一分間のラブストーリー〜

【Nコード】

N0039Z

【作者名】

AQ

【あらすじ】

二千文字程度の恋愛掌編を集めてみました。シチュエーションなど様々なので、お気に入りの作品を見つけていただけると嬉しいです。

1・冷蔵庫にゆずシャーベット

1・冷蔵庫にゆずシャーベット

冷蔵庫にはいつも、ゆずシャーベットが入っていた。甘い物が苦手な彼も、それだけは好きだった。私はバニラ、彼はほろ苦いゆず。「溶けちゃうから早く!」と手を繋いで走ったコンビニからの帰り道。宝石箱のような星空を指差して、私は「ねえ、覚えてる?」と幼い頃に食べたアイスの話をした。「その話聞いたよ」と呆れつつも、彼は優しく相槌をうつてくれた。

小さなソファの隣は、絶対譲れない私の指定席。暑がりな彼が「くつつくなよ」と言っても、私は「ヤダ」と舌を出した。「木のスプーン食べにくいのに」と我俣ばかりの私。横顔を見上げていると、すぐにアイスが滑り落ちる。キャミソールの胸元で、とろりと溶ける甘く白い滴。彼は笑いながら唇を寄せ、ペロリと舐め取ると「甘いな」と囁いた。眼鏡の奥で揺らめく瞳が、私にはなにより甘かった。

冷蔵庫のゆずシャーベットは、あの夏から減らない。

バニラアイスは、私の胸に落ちて張り付いたまま。

1・冷蔵庫にゆずシャーベット（後書き）

解説&作者の言い訳（痛いかも？）です。読みたくない方は、素早くスクロールを。

上記作品は『1P（400字）で物語を作る』という過酷な課題にチャレンジしたものです。タイトルは、某少女漫画タイトルからインスピレーションいただきました。『宝石箱』は、昔売ってた雪印のアイスです。バナラの中にキラキラの氷……衝撃的でした。物語そのものは「文字数制限の中でどれだけ“イチャイチャ”を盛り込めるか？」というのが目標でした。ラストの二文は、読者さまのご想像にお任せ……という形になってしまふことをお許しください。

2・マグカップにキャラメルティー

白いラウンドテーブルの上に、柄も大きさも違うマグカップが二つ置かれている。チビッコの方は、最近うちにやってきた新入り君。紅茶党の私のために、東京に住むお義姉さんがプレゼントしてくれた。表面にプリントされた、子猫が伸びをするシルエットが可愛い。

「なんか俺、みじめな気分……」

廊下を兼ねる狭いキッチンから、ガラスのティーポットを手にした彼が歩いてきた。情けなさ全開の口調に私はクスツと笑いつつ、テーブルの上にランチョンマットを敷き直す。二つのマグカップは、布の上にお引越し。

「みじめって、どうして？」

朝寝坊した彼の頭には、ぴよこんと寝癖が立ったまま。普段がぶつているクールな猫はどこへ逃げたのやら。糊の利いたスーツを着て「行つて来る」と告げる紳士とはまるで別人だ。普段使いの太いフレームの眼鏡と、形の良いあごにツンツン伸びた無精ひげは……まあ、似合ってるから許すけど。

「だって、毎日朝から晩まで働いてるのに、たまの休日にお茶の一杯も淹れてもらえないなんてさー」

カチン、ときた。

毎日美味しい手料理&愛妻弁当まで食べておいて、お茶くらいで文句言うなんて生意気な！

ラウンドテーブルの対岸に素早くまわりこみ、彼の腰めがけて軽くタックル。ティーポットが揺れて、開いた茶葉がふわりとジャンプする。「危ないからやめろよ」とすかさず雷様の声が落ちる。

彼の弱点、わき腹へ伸ばしかけた指を慌てて引っ込めると、私は大きな背中後ろに隠れた。ゴメンの代わりにギュツと抱きついてみる。洗いたてのTシャツからほのかに漂う花の香りが、鼻腔をく

すぐる。柔軟材を香りのやさしいものに変えたのは、正解だったかも。

微笑んだ私の唇から、ハミングみたいな言葉が零れた。

「だって、私が淹れるより美味しいんだもんつ。これって“適材適所”でしょ？」

彼の口癖をまんまと盗んだ私。呆れたような溜息の裏側には、目尻にシワをいっぱい寄せたいつもの笑顔があるはず。そんな風に笑ってくれるなら、私は何でもしてあげる。カーテンの白さにも、曇り一つ無い窓ガラスにも気付いてくれないけれど、全部許してあげる。

「あと半年待つてね？ 美味しいお茶、淹れられるようになるから」私の体温が移ったせいか、Ｔシャツの背中がじわりと汗ばんでいく。お茶が注がれるコポコポという音の後、猫背の向こうから「早く俺様の美味しい茶でも飲め」と低い声が響いてきた。はいと返事をしつつ、少し背伸びして日焼けした襟足にキスを落とすのは、ささやかなご褒美。後ろ髪が伸びてきたから、今度切つてあげよう。ベランダのミニトマトをどかして、ゴミ袋をかぶせた彼を置いて。嫌がったって止めてあげない。

テーブルの上には、ほんのり湯気が立つキャラメルティーが二杯。シュガーポットもティスプーンも無し。

「砂糖はダメだぞ。あとお代わりもダメ」

「うー……分かった」

私は椅子に腰掛けると、子猫のマグカップを手を取った。キャラメルの甘い香りに満たされる、二人の部屋。もうそろそろ、引越しの準備を始めなきゃ。

お揃いのマグカップに戻るまで、あと半年。

この可愛いマグカップを、小さな手のひらが握るのも、そう遠くない未来。

2・マグカップにキャラメルティー（後書き）

解説&作者の言い訳（痛いかも？）です。読みたくない方は、素早くスクロールを。

冷蔵庫にゆずシャーベットという作品を書いたときに、登場人物の背景が描き切れなかった（あの短さなのでまあ仕方ないところも……）という反省点から生まれた作品です。ちょうどタイミング良く、イチャイチャした新婚さんキャラが居たので、使いまわしました。『拾い物』の弟夫婦です。ということは、マグカップをくれたのは拾い物主人公、半年後に生まれてくるのが……ということになります。こういうリンクの仕方を他の作品でも良くやるのですが、それは決して手抜きではありません。群像劇が好きだからです。手抜きでは（以下略）

3・トーストにピーナツバター

腰に巻きつけるカフェ風エプロンは可愛いけれど、上着が汚れるから料理には向かない。私はあくびを噛み殺しながら、今日も普通のエプロンを手に取った。せっかく彼にねだって買ってもらったのに、悲しいことに一度も出番が来ない。「用と美は相容れないもの」という彼の言葉はやはり正しかった。

「さて、今日のメニューはどうしようかな……」

冷蔵庫に貼り付けたカロリー表とにらめっこした結果、私はアボカドとトマトを選んだ。角切りにして手作りマヨネーズをあえ、ちよっぴりのニンニクと黒胡椒をアクセントに。メインはカリカリベークンと半熟卵。それらを大きめのセラミックプレートに盛り付ければ、彼の好きなものばかりが詰まった完璧な一皿になる。コーヒ―豆もセツトしたし、あとは……。

『ガタン!』

洗面所の引き戸が開く音が響いてきた。トーストを焼く合図だ。

トースターに差し込むのは、彼が好きな『ヴィアン』のホテルブレッド。週二回バスで来店する私は、店員さんにすっかり顔を覚えられてしまった。焼き上がり前に着いてしまうと「もうちょっと待ってね」と声をかけられたり、たまに私の顔色が悪いときはお店の隅で休ませてくれたりする。

そんなとき私は決まって「スミマセン」と言っていたけれど、彼に「ありがとうの方が良い」と教わってから、それが私の口癖になった。

「うん、今日も良い匂い」

レトロなポップアップトースターから、キツネ色の耳がぴょこんと飛び出した。この子はいつもお値段以上の幸せをくれる。

何もつけなくても甘いけれど、うちではピーナツバターをつけるのが定番だ。「ピーナツ油はオレイン酸が豊富で健康に良い」から

って。オリーブ油や椿油みたいにお肌につけても良いらしい。彼はいつも私が知らない世界を教えてくれる。

鼻歌をうたいながらバターベラを繰り、ピーナツバターをたっぷり塗り終えたとき、彼がリビングにやってきた。

「おは、よ……」

言葉が、喉に詰まった。トーストを手のひらに乗せたまま、私の体は人形のように固まった。

ああ今日は“あの日”なんだ。彼が良く眠れなかった日。

昨夜、私を殴り足りなかったせい。

彼の冷たい手のひらが、トーストを持つ私の手に重ねられ……次の瞬間、私の視界は真っ暗になった。顔全体にぬるりと生温い油の感触。口の中に甘いピーナツバターが入り込む。目にも、鼻にも。パンが、床にベシヤリと落ちた。

遠ざかる足音を聞きながら、私の唇はいつもの呪文を唱えていた。

ありがとうございます。

ありがとうございます。

感謝しなきゃいけない。彼は私の顔に、肌の良いピーナツ油を塗ってくれたのだから。

3・トーストにピーナツバター（後書き）

解説&作者の言い訳（痛いかも？）です。読みたくない方は、素早くスクロールを。

『DV』という社会問題に興味があり、そこに陥った女の人の生活を切り取ってみようと思いました。世間的には『ポジティブ最高』みたいな風潮がありますが、ポジティブに受け取ることが、決して良いことではないケースもある……そんなことが皮肉っぽく伝わればいいなーと。（でも、彼女は幸せなのです。だから抜け出せないという……）

リベンジ（アホ）作品『トーストに、何つける？』をお口直しにどうぞ。

4・トーストに、何つける？

腰に巻きつけるカフェエプロンは可愛いけれど、上着が汚れるから料理には向かない。折り置まれたまま出番を待ち続けるそれに「ゴメンね」と謝りながら、私は今日も普通のエプロンを手に取った。後ろ手に紐を結び、踵のないダイエツトスリッパをつっかける。

「さて、今日のメニューは何にしよっかなー」

思い浮かんだ『カリカリベーコン&目玉焼き』は、冷蔵庫にくっつけた温度計を見た瞬間あえなく消え去った。朝六時だというのに表示は三十度。どうりで汗が吹き出すわけだ。

クーラーのリモコンに手を伸ばしかけ……迷った末に引つ込めた。賢い奥サマとしては、電気を使わずに涼しくなる方法を考えねば。

私は一度キッチンを出ると、冷水シャワーをサツと浴びて汗を流した。電気代節約の代わりに、思わぬ時間のロス。濡れ髪のままエプロンをつけてキッチンへ駆け戻り、冷蔵庫からアボカドとトマトを取り出す。夏野菜は体を冷やしてくれる優れものだ。角切りにして手作りマヨネーズをあえ、ちよっぴりのニンニクと黒胡椒、ハーブの効いたクレイジーソルトをアクセントに。

「メインは……ちよつと手抜きしちゃう」

再び冷蔵庫をのぞき込み、先週お取り寄せした『鴨とフォアグラのリエツト（ペースト）』と温泉卵をチョイス。リエツトは青いレタスの葉にのせ、温泉卵はココツトの容器に落とす。それらを舟形のセラミックプレートに盛り付ければ、涼しげな一皿のできあがり。残るはあと一品……。

『ガタン！』

洗面所の引き戸が開く音が響いた。彼が起きたから、そろそろトーストを焼こう。

トースターに差し込むのは、彼が好きな厚切りのホテルブレッド。焼き上がるまでのわずかな時間で洗い物をやつつけ、アイスコーヒ

ーを用意する。

「んー、今日もいい匂いつ」

私の声に応えるように、レトロなポップアップトースターからキツネ色の耳がぴょこんと飛び出した。この子はいつもお値段以上の幸せをくれる。

毎日食べても飽きないのは、つけるもの次第で鮮やかに変身するから。冷蔵庫の最上段には、デ IPP を並べたトレーが収まっている。ベーシッくなバター、口溶けの良い発酵バター、甘さ控えめなピーナツバターに、フルーツのコンフィチュール（ジャム）が数種類。

トレーをテーブルに移すと、並んだ容器の表面がじわりと汗をかき始めた。さっきシャワーを浴びた私の体もすでに汗ばみ始め、シヨートボブの毛先から肩や背中に落ちる滴が冷たい。

「そっか、こういう暑い日こそピタリじゃない？」

食器棚の引き出しから、お蔵入りのカフェエプロンを嬉々として取り出したとき、彼がリビングにやってきた。

私は、最高の笑顔で出迎える。

「おはよっ、ダーリン！ ねえ、トーストに何つけるか決めて？」

暑くてバターが溶けちゃう」

まだパジャマ姿の彼は、私を見つめしばし絶句した後、こう言った。

「暑いのは分かったから……せめて、パンツくらい履いてくれ」

4・トーストに、何つける？（後書き）

解説&作者の言い訳（痛いかも？）です。読みたくない方は、素早くスクロールを。

ドメスティックバイオレンスオチと、このアホオチで迷った結果、両方世に出すことにしました。このシリーズは予想外のオチはあまり用いないのですが、今回はドキッとしてもらえたかと思えます。そう、ハダカエプロン……日常にありうる天国（？）を提供してみたいなーと。ダーリンには、今回ツツコミをさせてみましたが、ノリボケさせても良いですねえ。しかし、その後の展開が（ピー）になってしまうので、なんとも……うふ。

5・ささやかすぎる贈り物　く重なる想い

おさげ髪を弾ませて、泣きぼくろの小柄な少女……桜子が駆けてくる。

「お待ちせしましたっ」

息を切らせ、着物の乱れを直す桜子。丸刈り頭を横に振った正二は、緊張した面持ちで「これをあなたに」と一枚の紙を差し出した。可憐な細い指が折畳まれたその紙を開く。

「まあ……」

艶やかな唇から感嘆の声が漏れた。

『願はくは　花の下にて春死なむ　その如月の望月のころ』

長い睫毛を羽のようにパタパタと動かし、右上がりな筆文字を何度も目で追うと、桜子は囁いた。

「正二さん達筆ですねえ。書道家になられたら？」

「桜子さんっ！　見るところ違いますから！」

叫んだ正二は、その勢いでゲホンと咳をした。一度の咳が呼び水となり、喉の奥がみるみる熱く腫れていく。

そんな正二の背中をさする、たおやかな手。

「ほら、大きな声を出すから。正二さんは昔から貧じゃ……病弱なの」

「ゴホッ……さく、ら……さん」

涙目になる正二。桜子はくすくすと笑う。

正二にとって桜子は一つ年上の幼馴染だ。守られる側の弟だった正二はいつしか桜子の背を追い越し、見た目はずいぶん大人になった。持病が正二を本の虫にした結果、今や正二は町一番の秀才。その才能を惜しむ声は、正二本人の耳にも届く程の噂になっていた。

「なのに……何故？」

桜子の独り言めいた呟きに、正二は姿勢を正した。ひゅうひゅうと鳴る喉を気合いで止め、口をへの字に曲げて。太く凜々しい眉の間に縦ジワが入る。

「もう知っているんですね。赤紙のこと」

冷たい風が桜子の前髪を揺らし、細い肩の向こうへと流れて行く。その先には慣れ親しんだ桜の木。薄紅色の蕾は春の訪れを告げているというのに、花開く時を待たず正二は戦地に行かなければならない。

いつもは青白い顔を赤く火照らせ、正二は言った。

「俺、必ず生きて戻ります。だから」

「あつ正二さん、その表情良いです！ そのまま動かないでくださいます？」

眉間のシワが深まる正二にも頓着せず、桜子は渡された紙を鞆にしまつと、新しい紙と鉛筆を取り出した。こうなつた桜子には逆らえない。大人しく制止した正二は、黙々と筆を動かす桜子の姿を胸に焼き付けた。

「……はい、完成です」

「見せてください」

「嫌ですよー」

無邪気に笑つて紙を背に隠す桜子。鬼ごつこの誘惑に乗りかけた正二は、桜子の瞳に夕焼けの茜色を見つけた。もう時間が無い。

「桜子さん、聞いてください」

「何でしょう？」

「あの歌を詠んだ西行法師は、桜の花を愛していました。『死ぬときは桜の下で』と願うくらい……そして俺も」

桜子の丸くつぶらな瞳が、パチパチと素早く瞬きする。これは一生懸命考えている時のしぐさだ。

つまり、伝わっていない。

正二は覚悟を決め、大きく息を吸い込んだ。

「桜子さん、俺はあなたと」

「これあげますっ」

肝心なところで邪魔をされる。

肩を落としたかけた正二は、手渡された紙を見てようやく気付いた。桜子は全て分かっているのだと。

描かれていたのは、匂い立つような満開の桜。と、太い眉にへん字口の少年。隣には泣きぼくろのあるおさげの少女。

絵の中の二人は手を繋ぎ、幸せそうに微笑んでいた。

「私、言葉なんて欲しくないんです。欲しいのは……」

静かに顔を伏せた桜子の足袋を、涙の雫が濡らした。

*

うららかな春の日差しが、レースのカーテン越しに差し込む。線香の香りが漂う和室にぴよこんと頭を覗かせたのは、つぶらな瞳を持つショートカットの少女。その背後では、色白の少年が口をへの字に結んでいる。

「今度はどんなイタズラしたの？ 姉ちゃん」

「イタズラじゃないよ、プレゼントだもん」

「昨日の“蛙”は、ばあちゃんには効果無かったみたいけど」

「うつ……」

少女はやや太めの眉の間に縦ジワを作る。「今どき珍しい物捕まえてきたねえ。ありがと咲子ちゃん。せっかくだから、コレは夕飯のおかずにしましょうかね？」と、蛙の足を摘んで笑った祖母。驚く顔が見たいのに、いつも振り返りにあう。

「今回はちよつと違うんだから……」

祖母が出かけた隙に、弱点を探すべくこっそり和室を物色した少女は、飴色になった桐箆笥の奥に古びた紙を見つけた。引き出しの

隙間から床に落ちてしまった、埃まみれの紙。重ね合わされた一枚には和歌が、もう一枚には大きな桜の木と大好きな祖母、去年亡くなった優しい祖父に似た人物が描かれていた。

少女はその“ラブレター”を、祖母が昼寝に使うそばから枕の力バーに差し込んだのだ。

帰宅した祖母は、今その枕で眠っている。

「ふーん。たまには粹なイタズラもするんだね、姉ちゃん」

「たまにはって失礼な！ てゆーかイタズラじゃないしっ！」

「ちよつ、静かに」

唇の前で人差し指を立てた少年が、不意に顔を強張らせる。少女が視線の先を追うと、そこには陽だまりの中でまどろむ祖母の横顔。まるで微笑むように穏やかな……その頬には、光る雫があった。

（夢で逢えたらいいね、おばあちゃん！）

姉弟は、そつと部屋を後にした。

5・ささやかすぎる贈り物　く重なる想いく（後書き）

解説&作者の言い訳（痛いかも？）です。読みたくない方は、素早くスクロールを。

電撃Lのお題『ささやかすぎる贈り物』は、珍しく自分にとってもマッチして、良い感じの話が作れました。まあ、落選したので所詮はそのレベルなのですが……。今作品では、珍しく構成を綿密に考えました。シーンは2つで、序破急。笑わせてしゅんとさせて、なごませる……。なんて、上手く行っていたら良いのですが。和歌を活用するというのも一つのしかけでした。詠み人は西行法師様で、意味は「どーせ死ぬなら、大好きな桜の花の下で死にたいな」です。死地に赴く男子にピッタリだなあと。桜と桜子をかけて告白なんてキザだけど、この時代だからこそって感じじゃないでしょうか。あと一作の中に、幾つの贈り物（幸せ）を混ぜ込めるかなーというチャレンジも、こっそり行ってみました。絵、手紙、無事に戻ってきしてくれたこと（もしくはそっくりさんと結婚……？　この辺も読者様のご想像におまかせ）、その後の幸せな家庭、最後に孫たちが見

せよつとつてくねた夢……と、蛙も忘れずにw

6・初恋

ゆらゆらと、笹舟が流れていく。

降り注ぐ日差しを跳ね返し、さざめくたびに色を変える水面。黄緑色の小船が、そよ吹く風に煽られ小川をゆつくりと下る。頼りなげなその様を見て、優は目を細めた。水に沈むまいと抗う健気さに、心がとらわれる。

「ユウ、あんまり乗り出すと川さ落ちっぞ」

「大丈夫だよ」

優は隣を歩く少年 恵司ケイジに笑いかけた。

梅雨の晴れ間の太陽は、雲に隠され続けたうつ憤をはらすかのように、強烈な熱をまき散らす。およそ運動とは縁のない恵司は、川べりの道を十分ほど歩いただけですっかり汗だくだ。皆が半袖の体操着で通学する中、恵司は長袖のワイシャツにネクタイという校則通りのいでたち。第一ボタンまできっちり止めたシャツに、恵司の性格が表れている。

…… 全く、見ているこっちが暑苦しい。

優は涼しげに波打つ川面に視線を戻すと、無邪気に微笑んでみせた。

「でもさ、入ったらきつと気持ちいいよ？」

「バカだなあ、こんなどぶ川は入って、気持ちいいわけねえべや」
吐き捨てるように告げる恵司。優は心の中で「うちの近くの川はもつと黒くて臭い、本物のどぶだったよ」と囁いた。

優の胸に蘇る、生まれ育った街。灰色のアスファルト、生温いビル風、車の排気ガス。

今視界に映るのは、見渡す限りの緑だ。

優がこの町へ移り住んで、早一ヶ月。前の街と比べては「全然違う」と驚嘆の声をあげていた優は、気付かなかった。素直過ぎるその言葉が、周囲を傷つけていたことを。

中三の夏。季節外れの転校生に、憧憬の眼差しを向けていたクラスメイトは、数日で態度を一変させた。優を『都会モン』と呼び、仲間の輪から締め出した。優は無口で大人しい生徒として、再出発せざるをえなかった。

完全な孤独ではないことが、不幸中の幸い。先に皆の輪からはみ出していた生徒が、優を受け入れてくれた。それが恵司だった。

『その本、俺も読んだ。面白れえべ』

休み時間を無言で過ごすようになり、三日目の朝。寂しさに耐えかねた優は、逃げ場を求めて一冊の文庫本を開いた。父の本棚から適当に抜いたその本は、あつという間に優を別世界へと連れ去った。だから優は、突然耳元で響いた低い声に、心底驚いたのだ。

そして、戸惑ったのは優だけではなかった。優を遠巻きに眺めていた生徒たちが、一斉にざわついた。その反応を見た彼は「何でもねえ」と呟き、すぐさま優から離れていった。

彼がいわゆる？村八分？扱いの男子ということとは、優も知っていた。でもそのときの優にとっては、小柄でやせっぽちで平凡な顔立ちの少年が、救いの神に見えた。

放課後、優が下駄箱を開けると、折り畳んだルーズリーフがあった。『本の話がしたい。伊瀬川の中橋の下で待ってる』 優は差出人を思い浮かべ、一人笑みを漏らした。皆の悪意が優に飛び火しないように……そんな気遣いに胸が熱くなった。

川沿いの土手を下ると、群生する隈笹の陰に文庫本を手にした恵司がいた。教室とはうって変わり、優に屈託ない笑みを向けてくる。優も笑顔で手を振った。たいした自己紹介もせず、そのまま読書談義に興じた。恵司の放つ言葉は、どこか都会の匂いがした。

この町は素朴過ぎる。優や恵司などの？頭でつかち？な子どもは、それだけで周囲から浮いてしまうのだ……優はそう結論付けた。

それから優は、恵司との距離を少しずつ縮めていった。ただ恵司は『学校では俺に近づくな』と優に強く命じた。

時折恵司は大柄な男子に取り囲まれ、罵声を浴びせられていた。

優にできるのは、唇を噛み目を伏せることだけ。空しさは、恵司と川べりを歩く時間で埋めた。

恵司は、初めて声をかけてきたときから優にやさしい。今もそうだ。ぼんやりと笹舟を追う優が砂利に躓くのを見るや、太めの眉をくつと寄せぶつきらぼうに言い放つ。

「この川、浅そうに見えつけど、場所によつては意外と深えんだ。水も冷やつこいしな」

「ふーん？」

「油断すつと、本当に落ちて風邪ひくぞ」

優を気遣う台詞とそぐわない、川面をねめつける鋭い眼差し。優はその意味を悟った。

恵司は、この川に落ちたことがあるのだろう。いや、落とされたのかもしれない……。

「そつか、じゃあ諦めよつと」

哀しみを胸に秘め、優は明るい声をあげた。

キラキラ、光る水面。

ここに飛び込むことができないのなら

優はくるり、と身体を反転させた。お下げ髪が肩先で弾み、膝丈のスカートが翻る。

恵司の正面に立ち、眩い太陽を背に、笑う。

「ケイ、夏休みになったら、海に行こうよ!」

手の平を差し出す優。恵司は優の瞳をまじまじと見つめ……そつと、その手を握った。

6・初恋（後書き）

解説&作者の言い訳（痛いかも？）です。読みたくない方は、素早くスクロールを。

去年のフェリシモ落選作です。一年寝かせて公開……読み直したんだケド、これはこれでいいような気がしたので、改稿せずそのままです。この作品ですが、テーマそのものを『三分間のボーイミーツガール』に転用（男子視点のラノベに加工）してみました。それくらい好きなネタです。イジメとかリアルにぶち当たると重苦しいものですが、それに屈しないことが幸福への一歩という気がして。救いはどこかにあるんだよ、というあたりも大事なメッセージですな。（……と、たまにはまじめなことも言ってみる。（＊

＊）ゞ

7・レイニーデイ　～雨音に魔法をかけて～

「雨が降ればいいのに」

窓の外は、今にも泣き出しそうな曇り空。俺は湿っぽい机に頬杖をつき、溜息混じりに呟く。

願いを聞きつけたのは、神様でも雷様でもなく……隣の席の愛だつた。

「一君、雨が好きなの？」

やや太めな眉の下、つぶらな瞳を真ん丸にして不思議そうに小首を傾げる。その表情は同じ年に見えないほどあどけない。ショート黒髪がサラリと揺れ、天使の輪がキラキラ輝く。

（うおおおちくしょお可愛いぜッ！）

なんて心の叫びは一ミリも漏らさず、俺は冷淡に言い放った。

「や、別に」

これは行き過ぎた照れ隠し。こんな態度だから、高校に入学して二ヶ月も経つというのになかなか友達ができない。女子に話し掛けられることなど皆無だ。

この、天然鈍感キャラの愛以外には。

「あ、何か隠してるー。ね、教えて？　お礼するから」

「……次の体育、マラソンでダルイってだけ」

「へえ、一君が愚痴ってるの初めて見たよ。ちよつと新鮮！」

愛は瞳のキラキラ指数を上げ、小柄な身体をズイツと寄せてくる。ヤバイ。これ以上近寄るな。イイ匂い過ぎて鼻血吹く。

「じゃ俺そろそろ行」

「待って、お礼がまだ」

「別にいいって」

「まあ聞いてよ、実は私魔法使いなんだ。今から一君の願いを叶えてあげる！　ね、目瞑って三秒数えて？」

ざわつく教室の片隅、俺は動悸息切れを必死で抑えつつ目を閉じ

た。と、耳をくすぐる愛の囁き声。

「さん、に、いち」

コッソ、コン、コン。

「……へ？」

俺のつむじにぶつかり、机の上で二回バウンドしたそれは。

「えへつ。『飴が降りました』……なんて」

（うあああ可愛いっていうかもう！）

「ばあか」

俺は苦笑と共に立ち上がり、駄洒落魔法使いの頭を軽く小突いた。愛がむつつと唇を尖らせるから、仕方なく飴玉を口に放り込む。

キュンと甘酸っぱいレモン味。包み紙のイエローがどこか懐かしい。

「あ、美味い」

「でしょ、私のお気に入りなんだッ」

パアツと明るい笑顔に戻る愛。

甘い物は苦手だけど……まあ、これなら悪くない。

「うわ、今更かよ……」

昇降口を出ようとした途端、待ち望んだ雨。激しく叩き付ける雨脚に顔をしかめ、行くしかないかと折り畳み傘を取り出しかけたとき。

視界の端に、キラキラ輝く天使の輪が映った。

「一君ッ！」

セーラーのリボンを弾ませて、愛が駆けてきた。「委員会の仕事長引いちやって」と軽やかな声が届くも、右から左ヘツツと抜けていく。

（これは俗に言う『相合傘』フラグッ！ いや待て落ち着け俺、残念ながら愛の家とは方向が真逆。「送るよ」ってのもさすがに不自然だ……）

「あ、もしかして一君も傘無いの？ 私もなんだ。困ったねえ」

そわそわする俺を見て勘違いした愛が、目尻をふにちゃんと下げて笑う。今更「傘あるし」とは言い出せない。かといって相合傘は難しく、この傘を貸すと言っても遠慮するに決まってる……だったら、「あのさ、愛」

「うん？」

「目瞑って十秒……いや、三十秒数えてくれ」

「えっ、一君も魔法使うの？」

俺が神妙な面持ちで頷くと、愛は恐る恐るというように瞼を下ろした。

その瞬間、愛の世界は雨音だけになる。そして律儀な愛が「さんじゅう」と呟いたとき、俺の姿は消えているのだ。

足元に、一本の傘を残して。

「うー……だりい、母さん水……」

「傘失くすなんてバカねえ。次は柄のところにでっかく名前書いときなさい。『ー』って」

「それただの線にしか見えねーし……」

母さんが「もっと変な名前つけりゃ良かった」と微妙な文句を垂れつつ部屋を出ていく。俺は苦い薬を飲み下しベッドにダイブした。「うっ、無様だ……」

あんな気障なことをしておいて、翌日風邪で寝込むとは。恥ずかしくてもう愛に合わせる顔が無い……でも、やっぱり会いたい……。止むことのない雨音。心地良いまどろみに落ちる俺に、神様はささやかなご褒美をくれた。

セピアな夢の中に現れたのは、制服姿の愛。

トレードマークの笑顔は消え、捨て犬みたいな目で俺を覗き込む。

「一君、昨日は魔法の傘ありがとね。だけど……」

ああ、ゴメン。そんな顔させたかったわけじゃないんだ。

『だって、私のせいで』

いいって。俺にとっては、愛が濡れない方が大事だったからさ。

目を真ん丸にした愛が「本当？」と尋ねる。俺は「本当だよ」と素直に答える。教室では言えない言葉たちが、静かな雨音に溶けていく。

『……ありがと。お礼に魔法かけてあげるね。風邪なんてすぐ治っちゃう、特別な魔法だよ』

聴き慣れた「さん、に、いち」の囁き声。チャリツという包み紙の音。仄かなシャンプーの香り。

そして 俺の唇にそつと触れた、レモンの甘み。

『一君、大好きだよ……早く良くなつてね』

翌日、すっかり熱が引いた俺が学校へ行くと、なぜか愛は居なかった。

愛の友人曰く、誰かに風邪を移された、らしい。

俺は「バカだなあ」と苦笑し……夕立の中、家とは逆方向に歩きだした。

口にレモン飴を放り込み、いつの間にか戻ってきた『魔法の傘』を広げて。

7・レイニーデイ 〜雨音に魔法をかけて〜（後書き）

解説&作者の言い訳（痛いかも?）です。読みたくない方は、素早くスクロールを。

電撃L『レイニーデイ』投稿作。電撃的には少々大人しい話ですが、個人的にはお気に入りの一作になりました。初稿バージョンからあちこち変えたのですが、某評価サイトに「ちゅーは口にするべき」とのご意見を聞く前は「ちゅーはほっぺだっぺ!」と思ってました。飴もシュワシュワサイダーです。やはし初めてのキスはいつの時代もレモン味なのかねえ……（遠い目

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0039z/>

恋愛掌編集　～一分間のラブストーリー～

2011年11月30日13時54分発行